

南宋臨安城の制度と特徴

唐 俊 傑^{*}

訳 松 本 圭 太

臨安城は、是南宋時期における実質上の首都で、行在所あるいは行都と当時呼ばれた。現在の浙江省杭州市老城区（上城区と下城区）にあり、平面形はおおよそ長方形で、総面積は約10.79km²である。2001年6月、国務院の批准を受け、南宋臨安城遺跡は、第五次全国重点文物保护单位となった。

一、概要

杭州において、初の州城建設は1400年以上前の隋代である。隋の開皇九年（589年）、錢唐郡を廃し、杭州が置かれた。同十一年（591年）、州治が柳浦西（現在の城南鳳凰山一帯）に移る際、山に築城された。城壁は、東ではおおよそ塩橋河（現在の中河）、西は西湖を臨み、南は鳳凰山に達し、北は錢唐門に至った。州城の「外周は三十六里九十步」であり、12座の城門が造られた⁽¹⁾。大業六年（610年）の後、南北に掘られた京杭大運河の全線開通に伴って、南北の経済文化交流が大幅に促進された。これが杭州の発展繁栄の基礎となった。

五代時期には、杭州は南方の一隅を占める小国、呉越国の首都となり、西府あるいは西都と呼ばれた。呉越国の支配者は、混乱していた五代十国期において、ここを不敗の地とするため、城壁を幾度も拡張し、夾城を築いた。また、鳳凰山の下には子城を建造し、外を羅城で囲んだ。その範囲はおおよそ南では六和塔、東は東河、北は武林門、西では雷峰に達した。その範囲は周囲七十里に達し、10の城門が設けられた。政治の中心は城南の鳳凰山一帯のままであったが、城市は東や北に向かって徐々に拡張した。同時に、境界防衛と人民安寧の政策が採られ、兵火を逃れて大いに経済発展した。「銭が蓄積され人民が豊かであるのは東南である。」と言われたのである⁽²⁾。北宋になり、杭州は「東南第一州」と誉れ称された⁽³⁾。これと五代時期における西府城を比べると、州城の規模はある程度縮小し、南北に長い城区となった。

靖康の変で北宋は滅亡する。南宋建炎三年（1129年）二月、高宗は北宋杭州の州治を行宮となし、九月、杭州は臨安府に昇格。紹興八年（1138年）、正式に臨安が都となった⁽⁴⁾。首都として140年間、杭州（臨安）は一躍、南宋の政治、経済、文化の中心となり、人工が集中、文化が繁栄した。首都経

※ 杭州市文物考古研究所

(1) 【宋】周淙『乾道臨安志』卷二「城社」，「南宋臨安兩志」，浙江人民出版社，1983年版。

(2) 【宋】袁枢『通鑑紀事本末』卷三十九上「錢氏据吳越」，中華書局標点本，1964年版。

(3) 【宋】祝穆『方輿勝覽』卷一「臨安府」，中華書局標点本，2004年版。

(4) 【宋】潜説友『咸淳臨安志』卷一「行在所録・駐蹕次第」，道光庚寅錢塘振綺堂汪氏仿宋本重雕，江蘇広陵古籍刻印社，1986年版。

済は空前の反映を誇ったのである。

元代、徳祐二年（1276年）、元軍が臨安を占領し、南宋は滅亡した。城壁および南宋の宮城は破壊された。元代末期、張士誠が杭州を占領、至正十九年（1359年）に改築、東に三里拡張、南に二里縮小した。元の南宋宮城を城外とし、明清杭州城の基本的構造が定まったのである⁽⁵⁾。民国に至り、杭州城壁は徐々に除かれ、至正十九年建造の鳳山水城門を留めるのみになった。南宋臨安城遺跡は、現代都市に覆われており、南宋宮城の北城壁が地表に露出しているだけである。

二、制度と特徴

南宋臨安城は、呉越国の西府城、北宋杭州の州城を基礎とし改築されたものである。南宋の支配者は、祖先の基盤であった中原を取戻すことをずっと願っていたので、臨安は行在所とされた。政治的介入と経済発展、州治と首都という役割の変化、南北文化の交流、融合、そして140年近くにわたる臨時首都としての使命により、南宋臨安城は鮮明な時期的、地域的特徴を持つに至った。

1、十分な政治的機能：宋が南下した当初は、時勢の不安定性や経済的逼迫により、南宋政権機構の多くは、北宋州城の基礎上に「創建」され、基本的な政治的機能をみただけであった（行都としての機能）。その後、情勢の安定化と経済発展に従って、必要な補強と改善を除き、南宋の歴代皇帝は、行都の大規模拡張を決して行わなかった。

南宋の臨安城は、宮城と外城に囲まれている。城市南部と南西部は、比較的高い丘陵地帯である。北部と東南部は平原で河川が交錯しており、歴史的に形成された伝統的城址の行政中心である。これらに加え、宋王朝南下直後の政治的動揺もあって、南宋宮城は比較的高い鳳凰山東麓に建設された。これは、中国古代都城制度における南宮北城という独特の構造をなしている。

南宋宮城は北宋州治を基礎とし、それを改築して出来たものである。四門が設けられ、自然の地形に沿って宮殿、遊覧地が置かれた。規模は大きくなく、面積50万㎡、宮殿配置は「前朝後寝」の慣例に基本的に一致するものである⁽⁶⁾。宮城はやや高い山地に位置し、平地面積は狭い。内部には正殿一棟のみで、各種儀式がここで行われ、「時々の儀式に従って名づけられた」のである⁽⁷⁾。城内の朝天門（現在の鼓楼）東側には、高宗と孝宗の退位後の居住である徳寿宮（重華宮）があり、南内と北内を並置する特殊な構造である。

城市中心は南北中軸線としての御街である。宮殿が南、城が北に位置するので、御街は、宮城北門と寧門から、真直ぐ北へ向かい城市の西北に達する。御街南部には、三省六部、樞密院などのような重要な役所が集っていた。その他の役所は住宅地に散在する⁽⁸⁾。多くの政府機関は、もともとの寺院を改築したものであり。三省や樞密院は、顯寧寺を改築したもので、臨安府治の前身も、五代北宋時期には淨因寺であった。

礼制建築は、北宋汴京城のように、御街両側に対称配置されたものではなかった。南宋の太廟は、城市南部の御街西側に、景靈宮は城市西北の新莊橋付近にあった。その付近には、万寿觀、東太乙宮

(5) 【明】田汝成『西湖遊覽志』卷七「南山勝迹」，浙江人民出版社，1980年版。

(6) 中国社会科学院考古研究所「杭州南宋臨安城皇城考古新收穫」，国家文物局主編『2004中国重要考古發現』，文物出版社，2005年版。

(7) 【宋】潜説友『咸淳臨安志』卷二「行在所録・大内」，道光庚寅錢塘振綺堂汪氏仿宋本重雕，江蘇広陵古籍刻印社，1986年版。

(8) 【宋】潜説友『咸淳臨安志』卷一「行在所録・皇城図」，道光庚寅錢塘振綺堂汪氏仿宋本重雕，江蘇広陵古籍刻印社，1986年版。

なども存在した⁽⁹⁾。

外城の平面プランは、東西が狭く、南北に長い長方形をなしており、城門は十三、さらに水門が五か所ある。その南は呉山をまたいで、北は部林門に至り、東南は銭塘江、西は西湖を臨む。基本的には、北宋州城の城壁の基礎に、高さ、厚みを加え、東南部のみをやや拡張している⁽¹⁰⁾。しかし、その防衛能力は、五代呉越の西府城や同時代の揚州城には及ばなかった⁽¹¹⁾。

2、改善された新たな住宅地制度。閉鎖的な旧坊制から、開放的な坊巷制となり、新たな都市居住管理制度が確立された。また、住民の日常活動にとっても大変便利になり、都市経済の発展を促した。

北宋の中期以後、都市商品経済の発展に伴って、集中的な古い市制は完全に崩壊した。北宋晩期の東京、平江、杭州などにおいて、新たな居住規格制度である坊巷制が、相次いで出現した。つまり、街巷によって居住区域を区分する方法が、坊に基づく居住、坊市分制という伝統的な方法に取って代わった。これは「中国古代城市居住区の規格制度が経た大きな変革」なのである⁽¹²⁾。

宋王朝が南遷して後、臨安では人口が急増し、商品経済が急速に発展した。これが、封鎖的な古い坊市分制、官と民の厳格な居住区分を完全に壊し、市坊が結合した、新たな坊巷制が一層強化された。南北を貫く御街の他、臨安城内にはさらに二本の南北の大路、東西方向の多くの大路と城門に繋がる道、大路の間を走る無数の小道が、南方特有の街巷体系を形成していた。官庁、住居、倉庫、商店、学校、娯楽施設などが分布し、非常に賑やかであった。

ここでは、古い坊壁が早くに消失し、かわりに街巷入口のところに坊表が立っている。例えば、臨安府治前に直立した坊表には「流福坊」、「近義坊」などと書かれた⁽¹³⁾。また、地方史の文献記載では、坊名の下に街巷名がつけられるのが普通である。例えば、「龍翔宮は後市街にある」、「通和坊、太平坊は俗に金波橋巷と呼ばれる」、「呉山坊は俗に呉山井巷と呼ばれる」が挙げられる⁽¹⁴⁾。坊の規模は齊一ではなく、大小があった。一般に、御街周辺の坊規模は比較的小さいが、人口が密集していた。南方は雨が多く、場内の物質輸送は河を用いることが多い。臨安城内の主要な街巷すべては、石板や磚などで舗装されていた。考古発見からいうと、南宋前期では一般的に磚、中期から南宋では板石が用いられた⁽¹⁵⁾。

新居住方法の治安と消防管理を高めるため、臨安の坊巷では、廂庁を伴う廂が設けられた。廂と坊巷は同様で、規模の大小があり、日常管理の需要に基づいて、随時調整された。南宋末年に至って、臨安城内外には十三廂がおかれた。

3、急速に発展した手工業生産：杭州は、唐、五代、北宋時期に連続的発展を遂げた。さらに宋王朝の南遷以降、大量の人口が南下し、特に北方工人の到来によって、南北技術がここで融合し、官営、民営の手工業が空前の発展を見せた。官営手工業は、主に宮廷と官庁の需要にこたえ、規模が大きだけでなく、細かい分業制を敷き、技術が精緻で、管理も厳格であった。民営手工業は全城内に分布し、種類も多く、範囲も広い。市民の日常的な需要を満足させるだけでなく、その製品は全国各地に出荷された。

(9) 【宋】潜説友『咸淳臨安志』卷三「行在所録・郊廟」，道光庚寅錢塘振綺堂汪氏仿宋本重雕，江蘇広陵古籍刻印社，1986年版。

(10) 【元】脱脱等『宋史』卷

(11) 中国社会科学院考古研究所等『揚州城』1987-1998年考古発掘報告，文物出版社，2010年版。

(12) 賀業鉅『中国古代城市規画史論争』，中国建筑工業出版社，1986年版。

(13) 【宋】潜説友『咸淳臨安志』卷十六「府治図」，道光庚寅錢塘振綺堂汪氏仿宋本重雕，江蘇広陵古籍刻印社，1986年版。

(14) 【宋】潜説友『咸淳臨安志』卷一「行在所録・駐蹕次第」，道光庚寅錢塘振綺堂汪氏仿宋本重雕，江蘇広陵古籍刻印社，1986年版。

(15) 杭州市文物考古研究所編『南宋御街』(上、下)，文物出版社，2013年版。

臨安の手工業生産は、製陶磁、酒造、製薬、絹織物、印刷、造船、金属器、兵器製造などを含んでいる。以下で、磁器、酒造と製薬業を例に説明しよう。

南宋官窯は、当時の官営手工業を代表するものである。南宋が臨安を都として後、北宋後期におこった宮廷用磁器の集中供給制度が再興した。そこで、「祖宗故事」にならい、臨安に2つの官窯が建てられた。それが修内司官窯と郊壇下官窯であり、御用磁器を専門に製作した。その作品は厚胎薄釉と薄胎厚釉に分けられ、釉色では粉青がよいものであるが、米黄や灰青なども存在する。器形には日常飲食器、装飾器具、文房具などを含み、宮廷生活各方面をカバーするものである。造形は端正、優美であり、釉色は玉のように潤っている。これらは、中国青磁の最高峰と讃え称されている⁽¹⁶⁾。

南宋臨安の酒造業は大変発達しており、厳格な専売政策が実行された。主には、宮醸、官醸と家醸の三種の形式からなる⁽¹⁷⁾。宮醸とは宮廷酒造であり、「宮中には内酒庫があるが、甲庫が最も優れている」⁽¹⁸⁾。徳寿宮にもまた酒造があり、2006年には、南宋徳寿宮遺跡で酒壇封泥が発見された。そこには、「三白泉」、「恵山米」、「上品」、「梅花」などと記されていた。臨安府治前（現在の清波門直街）には大規模の酒庫があった。西湖の戸部付近にもまた麴院があり（現在の西湖曲院風荷附近）、官庁の酒を製造した。この他、宗室、外戚などでも酒造がおこなわれたが、自給用であり、原則的に出荷はしなかった。

南宋時期の社会医療保障は比較的完全なものであった。紹興六年（1136年）、臨安には4か所の熟薬所があった。紹興十八年（1148年）のには、熟薬所が「太平惠民局」と改められた⁽¹⁹⁾。民間の薬店も大いに繁栄しており、惠民路一带には「楊將校薬店」があり、太廟前には「陳母泥面具風薬屋、大仏寺瘡薬舗、保和大師烏梅薬屋」などがあった⁽²⁰⁾。2005年、上城区白馬廟巷において発見された製薬遺跡では、薬用価値のある植物種が大量に出土し、ウメ、メロン、サクランボの種などが含まれていた。官民薬局の設立は、薬使用をある程度普及させ、民衆の治療を簡便なものにした。さらに、それは製薬業の発展を促進させたのである。

4、城市全体の商業ネットワーク：交易の迅速さは、商品経済の反映を促した。大量の人口集住、商人の地位向上に伴い、集中と分散を組み合わせた商業構造が整備された。交易地点の拡大と交易時間の延長により、商業活動は時空上の制限を超え、住民の日常生活もさらに加速された。

南宋以前には、杭州の商業活動は、主に城中一带（今の中山中路）に集中していた。宋王朝の南遷以後、城区の人口の急増、特に皇室や大部分の官人の移動に伴って、各種消費の需要を満たすべく、臨安城の商業経営活動が徐々に城市全域に広まった。「大街から諸坊巷にいたるまで、大小の商店が門を連ね、空き屋はない。毎日夜明けには、両街巷門の大商店で売買が多く為される。賑わいはご飯時まで続いたのち、市はたたまれる⁽²¹⁾」。商業活動が時間、空間的制限を受けず、朝市、夜市は途切れることなく行われ、夜通し行われた。「都城紀勝」の記載では、「宮城および寧門外から新路が南北に走り、珍しい玉、花、果物、流行の服、海鮮、鳥獣、珍品など、天下のものが全てここに集まる。朝天門、清河坊、中瓦前、壩頭、官巷口、棚心、衆安橋に至るまで食物店舗があり、人でごった返している。夜市でも精巧を極めた器物など様々なものが売られ、昼と変わらない⁽²²⁾」。

全ての臨安城の商業活動は主に御街を中心とし、南から北へ三つの中心がある。御街南段は、皇城北門と寧門から朝天門段に至り、皇城や中央官庁及び多くの高官貴族の住宅の近くを通り、主に高級

(16) 【宋】顧文荐「負暄雜錄」,元陶宗儀『說郛』卷一八,商務印書館,1937年版。

(17) 李華瑞『宋代酒の生産和征権』,河北大学出版社,2001年版。

(18) 【宋】李心伝『建炎以来系年要録』卷一八四「紹興三十年春正月丁酉」,上海古籍出版社,2008年版。

(19) 【宋】王昉麟『玉海』卷六十三「熙寧太医局」(光緒九年浙江書局刊本影印),揚州廣陵書社,2003年版。

(20) 21) 【宋】吳自牧『夢梁録』卷十三「舖席」,知不足齋叢書本,浙江人民出版社,1984年版。

(22) 【宋】耐得翁『都城紀勝・舖席』,上海古籍出版社,1993年版。

品、貴重品を提供した。(図六：中山南路南宋建筑遺跡(飲食関連遺跡)) 御街中段は杭州における商業の伝統的中心で、臨安城最大の商業中心でもあった。店舗が林立、多種多様なものが売られ、経営の範囲も日ごとに増加した。御街北段(現在の衆安橋と貫橋一帯)は、主に、城北一帯の市民の日常的需要を満たすものであった。日常用具、書籍の販売の他、臨安城最大の娯楽施設である瓦子があり、市民に娯楽や気晴らしを与えた。

この種の、御街を中心として全城に分布する商業構造は、臨安城の商業活動を大いに促し、市民生活を豊かにした。商業活動が頻繁となり、人の動きも多かった。官民が道を争い、道を占拠することもあり、その場合は政府が干渉せざるを得なかった。これが、南宋臨安の一大特色となった。

5、優美な風景の園林城市：南宋臨安城の発展史は、旧城の改築史である。しかしながら、その旧城改造は伝統的な城市構造を破壊することは決してなかった。むしろその形を利用し、城市の周辺に向かって発展し、活動空間を開拓した。これはまた公共空間の拡大であった。園芸の発展は、首都の生活を飾るもので、生活の質を向上させた。

臨安は、東は銭塘江、西は西湖を臨み、京杭運河の南端にあたる。城内外には河道が縦横に走り、交通は便利である。その風景は優美であり、地理条件にも非常に恵まれている。西湖はかつて、重要な灌漑と飲用水源地であった。また、三面が山に、一面が城に面した空間構造である。南宋の100余年を経て、皇室と市民の外遊、寺院参拝などの公共活動の重要な空間となった。その中は亭、樓閣で飾られ、梵鐘が絶えず響いた。城市と湖がそれぞれ重要な要素となり、人々の活動空間を開拓した。

城市は園林化し、そして園林は庭園化した。臨安が首都となって後、経済が発達し、南北の園芸技術が交流したことで、園林建築が発展した。城市全体が一つの大きな園林の集まりであるが、一般に、皇室や富豪邸宅には庭園を飾った園林があった。宮城内には後苑があり、臨安城内外にも玉津園、聚景園、富景園、延祥園などの皇室花園があった。高宗は湖山の景色を好み、退位後居住していた德寿宮にもまた美しい園林が建てられていた。そこでは塩橋河(現在の中河)の水を引き込み、「小西湖」を開削、石を積み重ね「飛來峰」とした。さらに、東西南北の四「地分」に基づいて、建築と草花を配置し、上皇の生活に休息と娯楽をもたらした。⁽²³⁾ 2006年、南宋德寿宮遺跡において、大型水路、水地、太湖石などの園林遺跡、遺物が発見された。皇室外戚から高官貴族までが同様に、私的な園林を各自設けた。例えば、城外の雷峰塔前には、張循王府の真珠園、城内の望仙橋東の牛羊司では、内侍蔣苑使家の私設花園などがある。

西湖の湖山風景は、以上のような、城内外に分布する大小の公私園林を加えることで、南宋臨安の巧みで細かい生活を体現している。それはまた、臨安を中国古代都城に少ない、風景の優美な園林城市にしたのである。

三、まとめ

五代以後、杭州は呉越国の都城となり、境界防衛、住民安寧政策を推進する中で、経済が迅速に発展した。宋王朝の南遷が、南北文化の融合と社会経済の大発展をさらに促した。臨安城は、この時期の社会経済文化における繁栄の代表であり、南宋政治、経済文化などの研究に対して、十分な意義を有する。

(23)【宋】『武林旧事』卷四「故都宮殿」，浙江人民出版社，1984年版。【宋】李心伝『建炎以来朝野雜記』乙集卷三「南北内」，中華書局点校本，2007年版。

特殊な歴史的要因と独特の地理的位置が、「南宮北城」の特殊構造を形成した。錦江湖、湖山風景が、百余年の営みに加えられ、臨安は中国古代首都（都城）にあって少ない、風景の優美な山水園林城市となった。

南宋臨安城は、中国封建社会が、由閉鎖的な里坊制から、開放的な街巷制に変わっていくことを示す代表例である。経済の発展が、城市空間構造の変化、城市の様相の改変を促し、中国古代都城制度の発展と変遷を検討する際、意義を持つ。そして、中国城市发展史上において、非常に重要で特殊な地位を占めるのである。

南宋临安城的建制及特点

唐 俊 傑^{*}

临安市是南宋时期实际上的都城，时称行在所或行都。它位于今浙江省杭州市老城区（上城区和下城区），平面略成长方形，总面积约10.79平方千米。2001年6月，经国务院批准，南宋临安市遗址成为第五批全国重点文物保护单位。

一、概述要

杭州第一次建造州城是在距今1400多年的隋朝。隋开皇九年（589年），废钱唐郡，置杭州。十一年（591年），移州治于柳浦西（今城南凤凰山一带），依山筑城。城垣大致东临盐桥河（今中河），西濒西湖，南达凤凰山，北至钱唐门。州城“周围三十六里九十步”，设城门12座。（1）大业六年（610年）后，随着沟通南北的京杭大运河的全线通航，极大地促进了南北经济文化的交流，为杭州的发展繁荣奠定了基础。

五代时期，杭州成为偏居一隅的南方小国吴越国的首府，又称西府或西都。吴越国的统治者为在战争纷乱的五代十国时期立于不败之地，对杭州城垣几度扩建，筑夹城，在凤凰山下兴建子城，外又包以罗城。其范围大致南抵六和塔，东濒东河，北至武林门，西抵雷峰。范围达到空前的周围七十里，设有10座城门。除了政治中心仍在城南凤凰山一带，城市逐渐向东、向北延伸。同时，采取保境安民政策，避免兵革之扰，大力发展经济，“钱塘富庶，由是盛于东南”。（2）及至北宋，杭州被誉为“东南第一州”。（3）与五代西府城相比，州城的规模有所缩小，形成东西窄南北城的城区形态。

靖康之难，北宋灭亡。南宋建炎三年（1129年）二月，高宗以北宋杭州州治为行宫，九月升杭州为临安府，绍兴八年（1138年）正式定都临安。（4）其作为行都近140年，杭州一跃（临安）成为南宋政治、经济和文化中心，人口集聚，文化昌盛，城市经济空前繁荣。

元德祐二年（1276年）元兵占领临安，南宋覆灭。城墙被拆除，原南宋皇城也遭焚毁。元末，张士诚占据杭州，于至正十九年（1359年）改筑杭城，东扩三里，南缩二里，将原南宋皇城一带截于城外，奠定了明清杭州城的基本格局。（5）民国起，杭州城垣逐渐被拆除，独留元至正十九年建造的凤山水城门。南宋临安市遗址现基本被现代城市所覆盖，惟南宋皇城北城墙残段尚出露地表。

二、建制及特点

南宋临安市是在吴越国西府城及北宋杭州州城的基础上改建而成。由于南宋统治者一直想要恢复祖宗基业，该城一直被当作行在所来经营。政治的介入与经济的发展，州治与都城的角色转换，南北文化的交融，以及将近140年的行都使命，使南宋临安市带有鲜明的时代和地方特点。

1、基本满足的政治职能：宋室南渡之初，由于局势的动荡和经济的窘迫，南宋政权机构的重建工作大都是在北宋州城的基础上“草创”而成，仅满足基本的政治职能（行都）。其后，终南宋一代，随着局势的稳定和经济的发展，除了必要的补充和完善，南宋各朝皇帝并没有对行都进行大规模的扩建。

南宋临安城包括皇城和外城。由于城市南部和西南部为地势较高的丘陵地带，北部和东南部为平原水网地带，加上历史上形成的传统城市行政中心所在，以及宋室南渡之初政局的动荡，故南宋皇城依然建在地势较高的凤凰山东麓，形成中国古代都城制度南宫北城的特殊布局。

南宋皇城是在北宋州治的基础上改建而成，设有四门，依自然地形布置宫殿园囿，规模不大，面积近50万平方米，其宫殿布局基本符合“前朝后寝”的惯例。(6) 由于皇城位于地势较高的山地之中，平地面积局促，宫中只有一座正衙，各种仪式均在同一殿内进行，“随事揭名”。(7) 在城中朝天门（今鼓楼）东侧另建有高宗和孝宗退位后居住的德寿宫（重华宫），形成南内和北内并置的特殊格局。

城市中心为南北向的中轴线——御街，由于皇宫在南、城在北，御街自皇城北门和宁门向北直达城市西北。御街南部集中了重要的衙署如三省六部、枢密院等，其它官署散布在民居之间。(8) 很多政府机构是以原有的寺庙改建而成，如三省、枢密院以显宁寺改建而成，临安府治前身即为五代北宋时期的净因寺。

礼制性建筑不像北宋汴京城那样对称设置在御街两侧。如南宋太庙位于城市南部的御街西侧，而景灵宫则位于城市西北的新庄桥畔，附近还有万寿观及东太乙宫等。(9)

外城平面为东西窄南北长的狭长形，有城门十三，另有水门五个。它南跨吴山，北到武林门，东南靠钱塘江，西临西湖。基本在北宋州城墙的基础上加高增厚而已，仅东南部略有扩建。(10) 其防卫能力甚至不及五代吴越西府城以及同时代的扬州城。(11)

2、新的街巷聚居制度更加完善：从封闭的旧坊制到相对开放的坊巷制，新的城市居住管理制度的进一步确立，为城市居民的日常活动提供了极大的便利，促进了城市经济的发展。

自北宋中期起，随着城市商品经济的发展，旧的集中市制彻底瓦解。北宋晚年，东京、平江、杭州等相继出现了新的聚居规划制度——坊巷制。以按街巷分段居住的方式，代替了传统的按坊聚居、坊市分制的方式，“体现了我国古代城市居住区规划制度所经历的一场大变革”。(12)

宋室南渡后，临安人口急剧增加，商品经济迅速发展，彻底打破了旧有封闭的坊市分制、官民分居的严格界限，更为开放、市坊结合的新的坊巷制得到进一步加强。除了贯通南北的御街外，临安城内还有两条南北向的大街，多条东西向的大街与城门贯通，大街之间是无数条小巷，形成南方特有的纵街横巷的城市街巷体系。官府、民居、仓储、商肆、学校、瓦子（娱乐设施）等分布期间，熙熙攘攘，热闹非凡。

在这里，旧有的坊墙早已消失，代之以跨立于街巷入口处的坊表。如临安府治前就有竖立的坊表，上书“流福坊”、“近义坊”等。(13) 在地方史文献记载中，常见坊名之下必注街巷名。如“龙翔宫在后市街”、“通和坊，太平坊对，俗呼金波桥巷。”、“吴山坊，俗呼吴山井巷。”(14) 坊的规模不再整齐划一，而是有大有小，一般在御街周边的坊规模较小，但人口密集。由于南方多雨，且城内物资运输主要以河道船运为主，临安城内主要的街巷都有石板或砖块等铺垫，从考古发现的情况看，南宋前期一般用条砖砌筑，中期后更以石板铺垫，南宋御街也是如此。(15)

为加强对新聚居方式的治安和消防管理，临安在坊巷之上设有厢，厢设厢厅。厢与坊巷一样，规模大小不一，亦无定制，根据日常管理的需要，随时调整。至南宋末年，临安城内外分置十三厢。

3、迅速发展的手工业生产：杭州经过唐、五代以及北宋时期的连续发展，加上宋室南渡以后，大量人口南下，特别是北方工匠的到来，南北技术在此交融，带动了官营和私营手工业的空前发展。官营手工业主要满足宫廷和官府的需要，不仅规模大，而且分工细、技术精、管理严。私营手工业分布全城，种类繁多、范围广，除了满足市民的日常所需，还远销全国各地。

临安的手工业生产包括制瓷、酿酒、制药、丝绸、印刷、造船、金属器、兵器制造等，以瓷器、酿酒和制药业为例：

南宋官窑是当时官营手工业的典型代表。南宋定都临安后，为恢复北宋后期兴起的宫廷用瓷集中供应制度，依“祖宗故事”，先后在临安建立了两座官窑，即修内司官窑和郊坛下官窑，专门生产御用瓷器。其产品分为厚胎薄釉和薄胎厚釉两种，釉色以粉青为上，另有米黄和灰青等。器形包括日常饮食器、陈设器、文房用具等，涵盖宫廷生活的方方面面。整体造型端庄典雅，釉色滋润如玉，堪称中国青瓷的顶峰。(16)

南宋临安的酿酒业也很发达，实行严格的榷酒政策，主要有官酿、官酿和家酿三种形式组成。(17)官酿即宫廷酿酒，“禁中既有内酒库而甲库所酿尤胜。”(18)北内德寿宫也有自酿酒，2006年在南宋德寿宫遗址曾出土一件陶质酒坛封泥，上有“三白泉”、“惠山米”以及“上品”、“梅花”等字。临安府治前（今清波门直街）有酒库，规模很大。户部在西湖边也设有麴院（今西湖曲院风荷附近），以满足官府用酒。另外，宗室、外戚等也自行酿酒，但只供自用，原则上不得出售。

南宋时期的社会医疗保障体系已比较完善。绍兴六年（1136年），临安设有4处熟药所。绍兴十八年（1148年）又改熟药所为“太平惠民局”。(19)民间药铺也十分兴盛，如惠民路一带有“杨将领药铺”；太庙前有“陈妈妈泥面具风药铺、大佛寺疔药铺，保和大师乌梅药铺”等。(20)2005年，在上城区白马庙巷发现的制药遗址曾出土大量具有药用价值的植物果核，有乌梅、甜瓜子、樱桃核等。官民药局（铺）的设立，使成药使用有所普及，给民众治病带来便利，也促进了制药业的发展。

4、遍布全城的商业网点：交易的便捷，促进了商品经济的繁荣。大量人口的集聚，商人地位的提高，商业布局的调整：集中与分散相结合。交易地点的扩大和交易时间的延长，商业活动摆脱了时空上的限制，居民日常生活更加便捷。

南宋以前，杭州的商业活动主要集中在城中一带（今中山中路），宋室南渡以后，随着城区人口的急剧增加，特别是皇室及大批官员的迁入，为满足人们迅速扩大的对各种消费品的需求，临安城的商业经营活动逐渐遍布全城。“自大街及诸坊巷，大小铺席，连门俱是，即无虚空之屋。每日清晨，两街巷门，浮铺上行，百市买卖，热闹至饭前，市罢而收。”(21)商业活动突破了时间和空间的限制，早市夜市接连不断，通宵达旦。《都城纪胜》记载：“自大内和宁门外，新路南北，早间珠玉珍异及花果、时新、海鲜、野味、奇器，天下所无者，悉集于此。以至朝天门、清河坊、中瓦前，坝头、官巷口、棚心、众安桥，食物店铺，人烟浩穰。其夜市……扑卖奇巧器皿、百色物件，与日间无异。”(22)

整个临安城的商业活动主要以御街为中心，自南而北分为三个中心。御街南段自皇城北门和宁门到朝天门段，由于靠近皇城、中央官署以及大量的达官贵人的住宅，主要供应高档贵重物品。（图六：中山南路南宋建筑遗迹——与饮食有关）御街中段是杭州传统的商业中心，也是临安城最大的商业中心，店铺林立，百货满盈，经营范围日益扩大。御街北段（今众安桥和贯桥一带）主要满足城北一带的市民的日常所需，除了供应日常百货和书籍外，另有临安城最大的娱乐设施——瓦子，供市民娱乐消遣。

这种以御街为中心遍布全城的商业布局极大地促进了临安城的商业活动，丰富了市民的生活。由于商业活动频繁，人流熙攘，官民争道、侵街占道现象时有发生，政府不得不出面干预，成为南宋临安的一大特色。

5、风景优美的园林城市：南宋临安城的发展史是一部旧城改造史。但其旧城改造并没有打破传统的城市格局，而是因形就势，向城市的周边发展，拓展了活动空间，特别是公共空间的扩大。园艺的发展，点缀了行都人的生活，提升了生活品质。

临安东濒钱塘江，西临西湖，京杭运河的南端，城内外河道纵横，交通便利，风景优美，地理条件得天独厚。西湖曾作为重要的灌溉和饮用水源地，三面云山一面城的空间格局，经过南宋一百多年的经营，

又成为皇家和市民出游和敬香礼佛等公共活动的重要空间，亭台楼阁点缀其中，钟声梵音不绝于耳。城与湖成为各自的重要组成部分，拓展了人类活动空间。

城市的园林化和园林的庭院化。临安成为行都后，经济发达，南北园艺技术的交流，促进了园林建筑的发展。整个城市就是一个大的园林集聚地，但凡皇亲国戚和大户人家都有园林装点庭院。皇城内有后苑，临安城内外另建有玉津园、聚景园、富景园、延祥园等皇家花园。高宗喜湖山胜景，其禅位后居住的德寿宫也建有精美的园林，如引盐桥运河（今中河）水入宫，开凿“小西湖”，叠石为“飞来峰”，再按东西南北四“地分”布置建筑和花卉，供太上皇生活、休息和娱乐。(23) 2006年，南宋德寿宫遗址曾发现大型水渠、水池、太湖石等园林遗迹和遗物。宗室外戚达官贵人也纷纷效仿，各自布置私家园林，如城外雷峰塔前有张循王府的真珠园，城内望仙桥东牛羊司侧有内侍蒋苑使家的私家花园等等。

西湖的湖山胜景，加上这些大小不一、遍布全城内外的公私园林，体现了南宋临安的精致生活，也使临安成为中国古代都城中少有的风景优美的园林城市。

三、小结

自五代起，杭州作为吴越国都城，在保境安民等政策的推动下，经济发展迅速。宋室南迁，更促进了南北文化的交融和社会经济的大发展。临安城成为这一时期社会经济文化繁荣的集中代表，对于研究南宋的政治、经济及文化等具有十分重要的意义。

特殊的历史原因和独特的地理位置，形成“南宫北城”的特殊格局；襟江带湖，湖山胜景，加上行都一百多年的经营，临安成为中国古代都城中少有的风景优美的山水园林城市。

南宋临安城是中国封建社会由封闭式的里坊布局转变为开放式的街巷布局的典型代表；经济的发展促进了城市空间格局的变化及城市面貌的改变，对探讨中国古代都城制度的发展和变迁很有意义，在中国城市发展史上占有非常重要和特殊的地位。

注释：

- (1) 【宋】周淙《乾道临安志》卷二《城社》，《南宋临安两志》，浙江人民出版社，1983年版。
- (2) 【宋】袁枢《通鉴纪事本末》卷三十九上《钱氏据吴越》，中华书局标点本，1964年版。
- (3) 【宋】祝穆《方輿胜览》卷一《临安府》，中华书局标点本，2004年版。
- (4) 【宋】潜说友《咸淳临安志》卷一《行在所录·驻蹕次第》，道光庚寅钱塘振绮堂汪氏仿宋本重雕，江苏广陵古籍刻印社，1986年版。
- (5) 【明】田汝成《西湖游览志》卷七《南山胜迹》，浙江人民出版社，1980年版。
- (6) 中国社会科学院考古研究所《杭州南宋临安城皇城考古新收获》，国家文物局主编《2004中国重要考古发现》，文物出版社，2005年版。
- (7) 【宋】潜说友《咸淳临安志》卷二《行在所录·大内》，道光庚寅钱塘振绮堂汪氏仿宋本重雕，江苏广陵古籍刻印社，1986年版。
- (8) 【宋】潜说友《咸淳临安志》卷一《行在所录·皇城图》，道光庚寅钱塘振绮堂汪氏仿宋本重雕，江苏广陵古籍刻印社，1986年版。
- (9) 【宋】潜说友《咸淳临安志》卷三《行在所录·郊庙》，道光庚寅钱塘振绮堂汪氏仿宋本重雕，江苏广陵古籍刻印社，1986年版。
- (10) 【元】脱脱等《宋史》卷
- (11) 中国社会科学院考古研究所等《扬州城》1987-1998年考古发掘报告，文物出版社，2010年版。

- (12) 贺业钜《中国古代城市规划史论丛》，中国建筑工业出版社，1986年版。
- (13) 【宋】潜说友《咸淳临安志》卷十六《府治图》，道光庚寅钱塘振绮堂汪氏仿宋本重雕，江苏广陵古籍刻印社，1986年版。
- (14) 【宋】潜说友《咸淳临安志》卷一《行在所录·驻蹕次第》，道光庚寅钱塘振绮堂汪氏仿宋本重雕，江苏广陵古籍刻印社，1986年版。
- (15) 杭州市文物考古研究所编《南宋御街》（上、下），文物出版社，2013年版。
- (16) 【宋】顾文荐《负暄杂录》见元陶宗仪《说郛》卷一八，商务印书馆，1937年版。
- (17) 李华瑞著《宋代酒的生产 and 征榷》，河北大学出版社，2001年版。
- (18) 【宋】李心传《建炎以来系年要录》卷一八四“绍兴三十年春正月丁酉”，上海古籍出版社，2008年版。
- (19) 【宋】王应麟《玉海》卷六十三《熙宁太医局》据光绪九年浙江书局刊本影印，扬州广陵书社，2003年版。
- (20) (21) 【宋】吴自牧《梦粱录》卷十三《铺席》，知不足斋丛书本，浙江人民出版社，1984年版。
- (22) 【宋】耐得翁《都城纪胜·铺席》，上海古籍出版社，1993年版。
- (23) 【宋】《武林旧事》卷四《故都宫殿》，浙江人民出版社，1984年版。【宋】李心传《建炎以来朝野杂记》乙集卷三《南北内》，中华书局点校本，2007年版。